



“コロナで想うこと”

東京工業大学情報理工学院 特任教授

長橋 宏 NAGAHASHI, Hiroshi

(当協会 光応用技術研修会／画像情報処理と機械学習講座 講師)

孤独感は、コロナ下にある今の社会において多くの人が感じている感情の1つである。年齢、性別を問わず、人との接触を避けることがコロナ罹患を防ぐ最良の方策である以上、対面接触や共同作業が抑制されることは避けられない。外出の自粛や諸々の社会活動の停止によって他人との交流が無くなってしまった結果、自分という存在の必要性にも不安を抱いてしまう人々も出てくる。寂しいという感情から、自分が必要とされていないと感じる疎外感へと知らず知らずのうちに変質してしまったのかもしれない。疎外感とは自らの行動にブレーキをかけ、人との対話も躊躇させてしまう。

ハーバード・メディカルスクールの臨床精神医学のロバート・ウォールディング教授は、長年の調査研究に基づいて、以下のように述べている。『私たちが健康で幸福にするのは、富でも名声でも無我夢中で働く事でもなく、良い人間関係に尽きる』と⁽¹⁾。今の時期、果たして良好な人間関係を維持することはできるのだろうか。

映像や音楽の鑑賞は、一時的に私たちの心を和ませストレスから解放してくれる。しかし、空虚感や疎外感を払拭することは難しい。これらの感情は、たとえどのような立場であれ、人との関わりや自分の社会的役割を認識することに関係しているように思われる。私たちは社会との関わりを持たずに生きていくことは困難である。そして、良好な人間関係を築き、それを維持していくためには、顔と顔を合わせた対話が不可欠である。

企業や団体などを維持・運営していくためには、豊富な資金力と優秀な人材が整っていることが重要である。また、組織に属する人々が持続的に働ける環境も重要である。図らずも、コロナ騒動によってそれぞれの組織における労働環境の違いが明らかとなった。業務の効率化や社員の福利厚生・勤務環境の改善などを目指して早々に在宅勤務制度を構築した組織では、業務の停滞を回避しながら次のステップへの足掛かりを模索していることだろう。一方、労働集約型の労務体制を重視してきた企業にとっては、社員の出勤管理が大きな課題になっているように思える。ただ、いずれの場合も人間関係を如何に維持すべきかを悩んでいる人は多い。

大学においても深刻な問題が浮かび上がってきている。大学には、組織との雇用関係のない学生が在籍している。彼らは、人間関係を築きつつキャリアパスの選択肢を広げるために大学にいる。コロナ渦中であって、彼らの修学環境に起きている問題が見逃せない。対面授業が難しいため、大学側はネットワーク環境を利用したリモート講義の拡充に注力し、在宅での単位習得を可能としている。しかし、遠隔講義では、教員が学生の表情や動きを常時見ながら講義を進めることは困難である。学生はネットを通して送られてくる講義資料とその説明を受動的に視聴するのみで、彼らの顔の表情や挙動の変化は教員には届かない。さらには、遠隔講義が学生同士のコミュニケーションの場にはなっていないことも問題である。

通常の教室での講義は、学生同士が互いにコミュニケーションをとる時間と場所を提供している。成人としての自己形成が必要な時期に、立場や境遇が似ている者同士が互いの考えを共有し合い、また異なる意見の存在を認め合うプロセスは、良好な人間関係を築く上で欠かせない。学生が大学へ通ってくるときには何気なく果たしていた隠れた役割を、現在は果たしていない。大学がこの重要な役割を担い続けようとするのであれば、遠隔講義に加え、学生同士が主体的に進めるゼミや演習などの開講も有益かもしれない。場合によっては、講義から離れて雑談を行うのもよいだろう。たとえ遠隔でも、学生にとっては疎外感から解放される貴重な時間となるかもしれない。結果として、教員の負担は明らか増えるのだが。

(1) TED トーク（日本語字幕付き）：「人生を幸福にするのは何？最も長期に渡る幸福の研究から」
(2015,11)

http://www.ted.com/talks/robert_waldinger_what_makes_a_good_life_lessons_from_the_longest_study_on_happiness?language=ja#t-16001